

## ハバナ市と市民生活

伊藤 滋 (都市計画家)



伊藤 滋 (いとう・しげお)

都市計画家。東京大学名誉教授。「2040年+の東京都心市街地像研究会」会長。

1931年東京生まれ。東京大学農学部林学科・同工学部建築学科卒業。東京大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。工学博士。東京大学工学部都市工学科教授、慶應義塾大学環境情報学部教授、早稲田大学特命教授、日本都市計画学会会長、建設省都市計画中央審議会会長、内閣官房都市再生戦略チーム座長などを歴任。著書に『提言・都市創造』（晶文社）、『東京育ちの東京論』（PHP研究所）、『東京、きのう今日あした』（NTT出版）、『たたかう東京』、『かえよう東京』（共に鹿島出版会）、『すみたい東京』（近代建築社）ほか多数。

### オバマ政権下約1年半の“キューバの雪解け”

キューバにとって、国家再生の第一のチャンスの鍵は、バラク・オバマだった。オバマが2015年4月にパナマで行われた米州首脳会議 (Summits of the Americas) の席で、キューバのラウル・カストロ前議長と59年ぶりに首脳会談を行った。そこで国交正常化に向けての話し合いが行われた。それを受けて2015年5月にアメリカがキューバをテロ支援国家の指定から解除をした。同年7月には相互に大使館を設置することで合意した。さらにオバマは2016年3月20日にハバナを訪れている。したがって、オバマ政権あるいは民主党政権が続いていれば、今のような貧しい状態からキューバは解放されていたに違いない。ところが、2017年に共和党のトランプが大統領に就任したために、国交正常化の流れが止まった。それでキューバは、また貧しい状態が続くことになった。

このように、トランプが大統領になる以前の2015年から2016年にかけての約1年半が、キューバにとって経済状態を回復させる極めて重要な時期であった。そこでキューバはこの時期に様々な分野の学者を招聘して国際会議を開催し、「アメリカの観光客が来たらハバナをこれだけよくする」ということを、世界中にPRしたわけである。

私の手元にある「ポートランド大学のキューバに関する報告書」(Museum of City「キューバについてのMEMO: 2012年ポートランド州立大学都市計画大学院報告書、2週間の滞在」)はオバマが大統領二期目の2012年に出されていて、ハバナ市については非常に詳細に書かれている。これは、オバマがキューバを訪問するに先立って、その友好ムードのなかでキューバを視察してまとめた報告書である。

キューバの20世紀以降の歴史を区分してみる。米西戦争(1898年)から、1959年のフィデル・カストロによるキューバ革命までの約60年間を“アメリカの植民地時代”であると、《第一期》としよう。

1962年にはJ.F.ケネディ政権下のアメリカとソ連が対立し、キューバ危機を迎えた。ニキータ・フルシチョフ政権下のソ連がキューバに核ミサイル基地を建設しようとして、米ソ全面核戦争の危機に陥ったことはよく知られている。キューバ革命の1959年から1991年のソ連崩壊に至るまでの約30年間は、ソ連がキューバの面倒をみていた共産主義同盟の時期であった。この時期は《第二期》である。

《第三期》は1991年の“ソ連の崩壊”からオバマがキューバとの和解を唱えた2015年までの約25年間である。この時期は、キューバにとっては、ソ連やベネズエラの支援がなくなって生きてゆかねばならない厳しい時期となった。現在に至るまで、30年の長期にわたりキューバは経済不況に陥り続けている。ソ連崩壊により経済支援が断たれ、キューバはGDPの3分の1を失ったと言われている。

そして《第四期》は、少し夢物語の感はあるが、2015年から2016年にかけてのオバマ大統領が進めたアメリカとの雪解け期間の2年間である。それが2017年のトランプ政権誕生で凍結された。この4つのフェーズを踏まえながらキューバの話をしてゆきたいと思う。

### キューバの“ダブルカレンシーシステム”

私にとって、キューバの通貨(カレンシー)システムは今もってわからない。キューバには2つの通貨がある。在ハバナの日本大使が我々にキューバの実情をレクチャーしてくれたときに、大使館員もドルとキューバペソの交換に2つのルートがあることを明確には説明できなかった。キューバの国際ペソと米ドルの交換比率は1対1であるから、表向きにはキューバの国民所得は1人当たり7,000ドルとされている。しかし、ローカルカレンシー(金融市場で他国通貨と自由に交換できない通貨)を使えば、実質のキューバ国民の1人当たり所得は、1,000ドル以下の貧しさではないかと思う。

キューバの日本大使館職員が説明したローカルカレンシーは1ドル=24ペソである。キューバに行って日本のカメラを買うとしよう。カメラが2万円だとする。1ドル=110円で計算するとカメラは米ドルで180ドルになる。これは国際ペソでは180ペソである。それに輸入税が日本の価格に30%かかるから、国際ペソでは230ペソになる。しかし国内ペソでは買えない。だからキューバ人もドルを買ってそのドルで日本のカメラを買っている。これは北朝鮮でも見られる状況に通じる。キューバは国際的にドルが欲しい。(注:キューバには外国人用の「CUC(クック):基本的にUSドルと等価」とキューバ人用の「CUP(ペン)」の2つの通貨がある。CUC=110円、CUP=4.2円。)

しかし、国民に対して食料や医療や教育を提供するときに、政府はドルとは関係なしにローカルカレンシーで実施できる。豚肉100gがローカルカレンシーで10ペソとしても、キューバ政府はペソをいくらでも刷れるから問題ない。ローカルカ

レンシーが回っていれば日常生活は困らない。キューバのように社会全体が貧しければ多くの国民は高級品を買うようなことはしないのである。

ところが、キューバ人のなかにも外国人相手の旅行社に勤めているような高給取りもいる。そのような少数であるが金持ちの階級もキューバ社会には生まれてきているらしい。

### キューバではほぼ全員が“公務員”

共産主義国家キューバでは、食料、医療、教育の3つのサービスは完全に保障されている。健常人であれば、食事して、医者にかかり、教育を受けることができれば、金持ちでなくても頭のいい子なら英語をマスターして技術者になり収入も少し増える。この3つの国家サービスが国民にタダで配られるわけだから、キューバの国民はそれで満足している。

なぜ満足するかというと、1959年までのバティスタ独裁政権下では、富める者と貧しい者の差があまりにも激しかったからである。ところが、フィデル、ラウルのカストロ兄弟とチェ・ゲバラが、1959年にバティスタ政権を潰し、全ての富める者を放逐してしまった。革命直後は国民の全てが貧しかったので、食料・医療費・教育が保障されていれば満足したのである。金持ちがいたとしても、キューバの共産党幹部などの特権階級の地位にある者や、外国との交易で儲けている者たちだけで極めて少数に限られていた。こうした人たちは当時のキューバ国民720万人強のうちの2~3万人くらいであったのであろう。残りの700万人の大多数は、貧乏だけれども平等な状態に満足していた。

ただし、満足する一方で、付加価値のあるものを生み出そうという意欲を持つ人間は少ないように思う。それが現在のキューバの大きな問題になっている。キューバの共産主義社会では、国民のほとんどが国家公務員である。そこが中国のようなエリート階層が共産党員である国家との違いである。キューバでは皆共産党員であり、キューバ全人口の85%が国家公務員である。街の道路掃除人も公衆トイレを修繕している人も国家公務員、医師も大学教授も皆国家公務員である。遅配なく給料がきちんと出るから満足している。

もうひとつ皆が現状の生活に文句を言わない理由は、キューバの温暖な気候にある。凍死することは考えられない。共産国家でも北の共産国家には暗い雰囲気がある。それは冬になると雪が降り、気温は低くなり、家の中に閉じこもるから

である。北の共産主義国の国民は皆ひっそりと暮らすしかない。窓を閉め切るから隣が何をしているのかわからない。秘密警察がそれを探ろうとする。より一層閉鎖的な社会になる。ところがキューバでは暑いから自ずと外に出てくるようになる。窓も開け放しになる。人声も薄い壁の筒抜けでよく聞こえる。

住宅に対する配慮も異なる。北の共産主義国家を一番象徴する市街地像は、全く面白みのないロシアの高層労働者集合住宅である。寒さを二重窓で防ぎ密室にしている。一方、キューバの労働者の住宅は窓が半分壊れていて、バルコニーでごろ寝している。そこに大きな違いがある。

### キューバには“密告社会”がない!?

密告社会というのは小さい部屋がコンパートメントになっていて、内部のことが窺い知れない街で生まれてくる。政府も警戒して周りの人に密告するように仕向ける。それがソ連や旧東ドイツで行われていた。ロシアやドイツの小説には暗い天気の中で窓を閉めてショーペンハウエルを読んでいるような話が出てくる。

ところがキューバは寒くない。窓を開け放しておいた方が快適だから透け透けになる。基本的にネイバーフッド(隣近所)が成立する。しかもナポリの街のように、バルコニーのフェンスに主婦がもたれて、狭い路地を挟んで話をしているから秘密がない。地域社会としては何々村という“縄張り主義”が強いから、そこによ者が入ってくると口頭で隣近所に情報が伝わる。それは一種の地域社会を安全に守る居住者の知恵である。密告しろと言われても政治的な関心がない。よ者が来たときに隣近所に伝えるだけである。北朝鮮や旧東

ドイツやロシアでよく知られる“隣近所の誰が密告者かわからない”という社会体制は、南国の共産主義では成り立たない。

### キューバ人は“愛国者”である

私の手元に集められたいくつかの報告書を読んで、ひとつわかったことがある。キューバ人はキューバを愛していることである。特に知的階級に属する建築家が威張って主張することは、「我々キューバの街にはスペインの伝統がある」ということである。このスペインのコロニーは南仏やイタリアとも似ている。自動車も通らない狭い路地の両脇に厚みのある石造りの建物が建ち、窓が開け放たれていてバルコニーがある。建物の内部には中庭があって、それが口の字型に配置されている。表通りから入ると必ず中庭がある。中庭は日陰で、太陽が燦々と注ぐ表通りと中庭には温度差が生まれ、家の中に風が通るので涼しい。おまけに建物が狭い路地を挟んで建っているので路地そのものも涼しい。

イタリアの場合は路地が複雑に入り組んでいるが、スペイン市街地の道路は格子型と言われていて、ハバナはその伝統を受け継いでいる。ところが、新しい20世紀型の街づくりをするに逆に伝統的な市街地を壊してしまう。その時期は2回あった。一度目は第二次世界大戦後のパティスタ政権下の、国際建築横行の時代である。二度目はそれに続く1959年以降のソ連の介入時代である。この時期にはソ連がつくりあげたプレハブのつまらない高層住宅群がキューバの各都市に“ばんきよ”した。

ところが、問題は共産主義になったときに、国には余分なお金がなかった。国民全てに食料供給、医療給付、教育の提供を図ろうとすると、予算は限られているから、街並みの



古くからの町屋の家並み。ここは廃墟ではない。窓ガラスがない部屋に市民は普通に暮らしている。チェ・ゲバラの看板が忘れられたように残っている。



バルコニーの鉄のフェンスは、錆びて完全になくなってしまっている。エレベーターはもちろんない。

保全が疎かになる。カストロが議長になったとき、「資本主義社会によってハバナに人口が集中したから問題が起きた。したがって、共産主義社会では地方都市に人を集め、近い距離を保ちながら人々が繋がるようにする。そういう国をつくりたい」と考えた。ハバナ市に投資するのではなく地方都市に手厚く資金を配分した。

### 思想に関係ない大都市志向

だが、この政策は失敗する。地方都市に予算を振り向けても人はそこに住まなかった。むしろハバナ市に人々は集まってきたのである。これは共産主義のイデオロギーと実際の人の動きとのギャップである。共産主義経済は理想を立てて物を配り生活を保障するが、全てがその通りにはならないから“ひずみ”が生まれる。

共産主義に移行したキューバは生産性も低くて税収も伸びない。限られた予算は建物の修繕や上下水道や道路の補修に回らなかった。特に下水・上水は問題がある。放置しておくとな上水に何が混じるかわからない。下水が漏れれば建物に浸透し、いずれも公衆衛生上に大きな問題が生じる。ところが、共産革命後の政府はインフラにも住宅にも資金を振り向けられなかった。今もお雨水を利用している家もあるし、水道水は直接飲むことは不可能である。道路もまた補修が疎かになり、高速道路は整備されることはなかった。鉄道も新たに整備されることはなかった。共産主義革命でなんとか国を維持できたのは、ソ連とベネズエラが支援したからである。ソ連は資金や物資を支援し、ベネズエラは安い価格で石油製品を供給した。ソ連は、プレハブで醜い“ソーシャルハウジング”と



ハバナ市中心街の比較的良質な住宅地。ただし窓ガラスがない。屋根のルーフィングが古くなってはげかかっている。

呼ばれるソ連型の労働者高層共同住宅を建てた。

ソ連崩壊前から地方にいる若者たちが大都市に憧れてハバナ市に集まってきていた。映画も観たいしダンスもしたい、大学でもう少し高度な教育を受けたい。このように熱望するのは、資本主義・共産主義に関係なく若者の共通の憧れである。大都市への人口集中は所得の向上に伴って必然的に起こることである。ところがカストロ政権の時代は、共産主義に基づいて土地も建物も国家のものとして扱われていた。土地の売買や賃貸は禁止された。そうすると家を建てるのは国家が担い、個人は自宅を建てることはできない。建物を修繕するにしても同様に国家が行うことになる。貧しい国民は修繕する余力はない。

その状況に関係なくハバナ市に人が集まってきた。地方からの若者が不法にハバナの街の中に入り込んで、わずかな家賃で住むようになる。元々の地主は、わずかでもお金を得るために地方から来た若者に寝る場所を与える。しかし、過密居住で寝ることができない。そこで6時間の“交代制で寝る”ようにして、寝る人以外はバルコニーで涼んでいなければならない。ハバナの過密居住はそういったことまで起きた。キューバはおそらく地縁社会であるから、地方から姪や甥などの血縁者が来れば、彼らを受け入れざるを得なかったのであろう。

超過密居住の中で寝なければならないという状況下になったハバナ市では、昔の天井の高い住宅の中間に床を設けて中二階をつくりそこに人を住ませることも起きた。また、屋上にバラックを増築して部屋をつくりそこでも都市に集中する人を受け入れた。ハバナ市はそれほどの過密居住に襲われたのである。そうした状況下でも人びとが生きられるのは、キューバが亜熱帯の海洋性気候であるからである。(続く)



中心市街地の住宅の横につくられた粗末な商店。